検証 拓銀崩壊

<9> 10.10.27

刑事告訴で降伏迫る

湖畔の丘にそびえる白い威容ー。拓銀とカブトデコムが二人三脚で築く"夢の城"となるはずだった「エイペックスリゾート洞爺」は、一九九三年六月九日にオープンした。

この日、同リゾート内で数百人を招き完成披露パーティーが開かれていた。カブトの佐藤茂社長が壇上から言った。「私のロマンと夢を実現にこぎ着けたのは、拓銀の海道常務らのおかげです。海道常務、ちょっと立ってください」

少し照れたように海道弘司・拓銀元常務が立ち上がる。「常務」と昔の役職で呼ばれたが、その時は既に拓銀を離れた身。拍手を受ける海道のそばで、拓銀から出席した広瀬恭平常務は完全に無視された。

すでに拓銀とカブトとの断絶は明らかだった。拓銀はカブトグループ企業のうち収益力のある「エイペックス」と「リッチフィールド」を自らの傘下に収め、選別支援を宣言。佐藤はそれに反発していた。パーティーでの光景は両者の暗闘を象徴していた。

この後、拓銀は露骨な強行策に出る。まずはエ社とリ社の経営権を強引な方法で完全にカブトから引きはがし、さらに、七月十三日には拓銀の意を受けたエ社とリ社が、佐藤を札幌地検に手形偽造などの罪で告訴した。暗闘は一気に全面戦争へと突入した。

●

この一連の動きの裏側で拓銀には、ある「思惑」と「懸念」が同居していた。

全面戦争

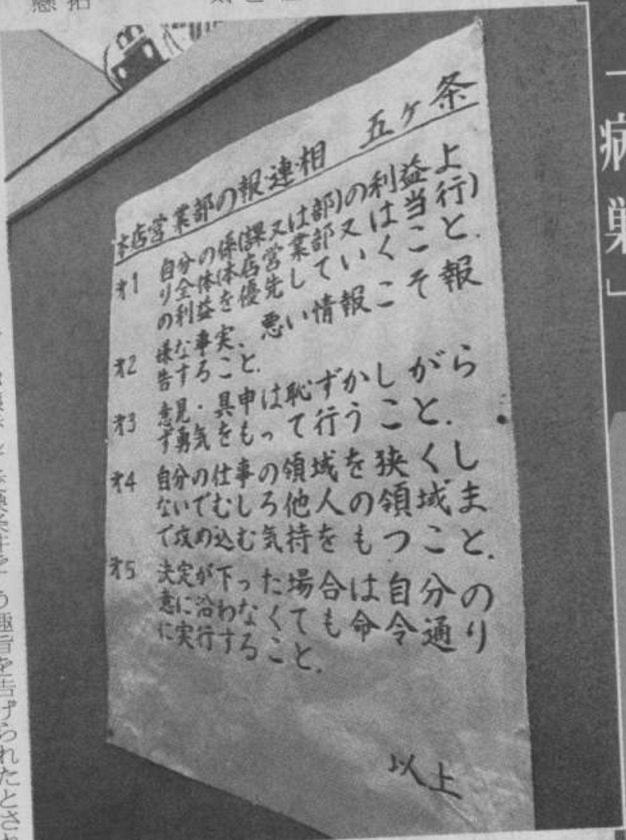
「思惑」とは刑事告訴の取り下げを交換条件として、カブト側に佐藤の社長退陣など全面降伏を迫ることである。

一方、「懸念」とは自らに忍び寄る司直の手だった。六月以降、拓銀の行員や担当幹部が相次いで地検に任意で事情を聴かれていた。カブト絡みの融資に地検が関心を示していたことは予感できた。

八月末、拓銀は広瀬常務を地検に差し向け、告訴取り下げを申し出ている。この直前、カブトが譲歩して交換条件をのむという「白旗」を上げてきたからだ。

だが、取り下げは認められなかった。地検から戻った同常務は青ざめていたという。関係者によると同常務は地検から「取り下げるなら、拓銀の特別背任を立件する」という趣旨を告げられたとされる。

拓銀は、ようやく地検の「真意」を知った。拓銀が対カブトの切り札とした刑事告訴は地検にとっては、本丸に切り込むための入り口だった。本丸とは拓銀からカブト周辺、さらにカブトから政治家へカネが流れた、とみられていたことを指す。


本店営業部の報連相 五ケ条
第1 自分の係(課又は部)の利益より全体(本店営業部又は当行)の利益を優先していくこと.
第2 様な事実、悪い情報こそ報告すること.
第3 意見・具申は恥ずかしがらず勇気をもって行うこと.
第4 自分の仕事の領域を狭くしないでむしろ他人の領域まで攻め込む気持をもつこと.
第5 決定が下った場合は自分の意に沿わなくても命令通りに実行すること.
以上

5ヵ条

報告、連絡、相談。いわゆるホウレンソウ。「悪い情報」は報告されず隠された

拓銀の描いたカブト処理はとん挫した。降りかかる火の粉におびえながら、強行策に出るに出られない拓銀は、カブトとの泥沼に一層突っ込んでいく。

十二月六日、佐藤が手形偽造の容疑で逮捕される。早朝、自宅の高級マンションから捜査官に連行される佐藤は、報道陣のフラッシュを浴びながら「カブトは大丈夫。心配ない」との言葉を残した。

だが、地検の捜査も難航を極め、結果的には拓銀の特別背任など本丸の立件を断念。わき役のはずの手形偽造の件だけで佐藤を札幌地裁に起訴した。

●

この事件の初公判から約半年がたった九四年九月はミステリアスな月だった。

まず八日、佐藤の自宅マンションなどから盗聴機が発見された。その六日後には、同マンションの管理人が屋上から転落死した。警察は事故と断定したが、管理人の愛用の眼鏡が当初現場から発見されず、死はさまざまな憶測を呼んだ。

また、二十九日には札幌地検で事件を担当する四十六歳の検事が、執務室で首つり自殺を遂げた。一連の事件は今も多くの謎（なぞ）を残す。

それはカブト・拓銀問題の深淵（しんえん）をのぞかせ、拓銀がはまり込んだやみの深さを象徴していた。

だが、実は、もっと深いやみがバブル期以前の拓銀にはあった。

それを「病巣の源流」と呼ぶ人もいる。それを探るには時計の針を大幅に巻き戻さなくてはならない。

＝敬称略、肩書は当時

（拓銀問題取材班